

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	23228004	研究期間	平成23年度～平成27年度
研究課題名	脳内成長因子の生理作用と病態に関する研究	研究代表者 (所属・職) <small>(平成28年3月現在)</small>	西原 真杉（東京大学・大学院農学生命科学研究科・教授）

【平成26年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)		
<p>これまでの研究により、様々な <i>in vivo</i> と <i>in vitro</i> の実験方法を用いて研究を進め、プログラニューリン (PGRN) が広範なストレスに応答して神経細胞で発現し、ストレスによる神経細胞死を抑制する作用を有する事実を発見する等、生体防御機構にとって極めて重要な新知見を明らかにしている。これまでの研究成果は、原著論文や総説として公表したほか、多数の国内外における学会の招待講演や一般講演でも積極的に公表している。さらに、研究を進める過程で、筋前駆細胞においても PGRN が発現する事実を発見するなど、PGRN の生体維持機構における重要性も明らかにしている。以上の研究成果は、本研究の計画に沿って着実に進展していると評価される。今後は、当初の研究計画に沿って、更なる新知見を得るとともに論文としての公表に努めていただきたい。</p>		

【平成28年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	<p>本研究は、緻密に構築された研究計画に沿って行われており、当初の予定どおりの成果が達成されている。</p> <p>具体的には、プログラニューリン (PGRN) ノックアウトマウスを用いて、PGRN の役割や作用機序の解明を進めただけでなく、PGRN 変異と神経変性疾患との関係を新たに提唱したことは、非常に意義のある成果と言えよう。</p> <p>本研究で注目された筋萎縮性側索硬化症 (ALS) 以外の神経変性疾患の発症機構の解明や治療法開発に、本研究の成果が活用されることを期待したい。</p>